

薬剤耐性ワンヘルス動向調査年次報告書

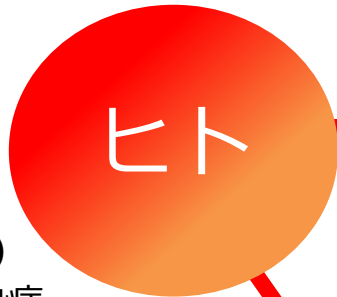
2019

Nippon AMR One Health Report 2019 (NAOR)

薬剤耐性ワンヘルス動向調査

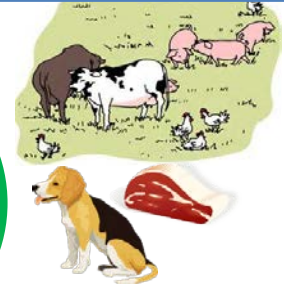
- ヒト・動物・食品・環境に関する各サーベイランスのデータに基づき、統合的な分析、評価を実施し、抗菌薬使用量や耐性率の公表、耐性菌の拡散の早期発見、水平伝播の存在の把握等を図る。
- ワンヘルス動向調査年次報告により、本アクションプランの成果指標を評価。

- ヒトの抗菌薬使用量 (IQVIA)
- 入院患者での耐性菌 (JANIS)
- 入院患者での医療関連感染症 (JANIS)
- 薬剤耐性菌による感染症 (NESID)



- 水圏・土壌における耐性菌等

薬剤耐性
ワンヘルス
動向調査

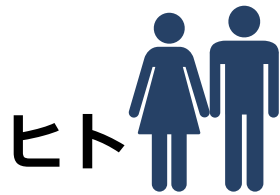


- 家畜用食用動物への抗菌剤使用量
- 畜産動物糞便中の耐性菌
- 食品中における耐性菌
- 愛玩動物における耐性菌

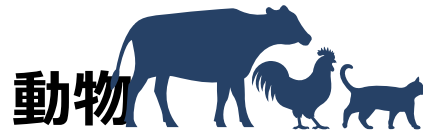


- 「ワンヘルス動向調査報告書2017」 2017年10月に公表
- 「ワンヘルス動向調査報告書2018」 2018年11月に公表
- 「ワンヘルス動向調査報告書2019」 2019年11月27日に公表

ワンヘルス動向調査年次報告書2019



ヒト



動物



食品



環境



日本における耐性菌の現状

- グラム陰性・陽性菌
- 結核菌
- サルモネラ菌 など
- 家畜由来細菌
- 養殖水産分野
- 愛玩分野
- 鶏肉の調査
- 下水処理場の調査



日本における抗菌薬使用量の現状

- ヒト用抗菌薬
- 動物用医薬品
- 抗菌性飼料添加物
- 農薬

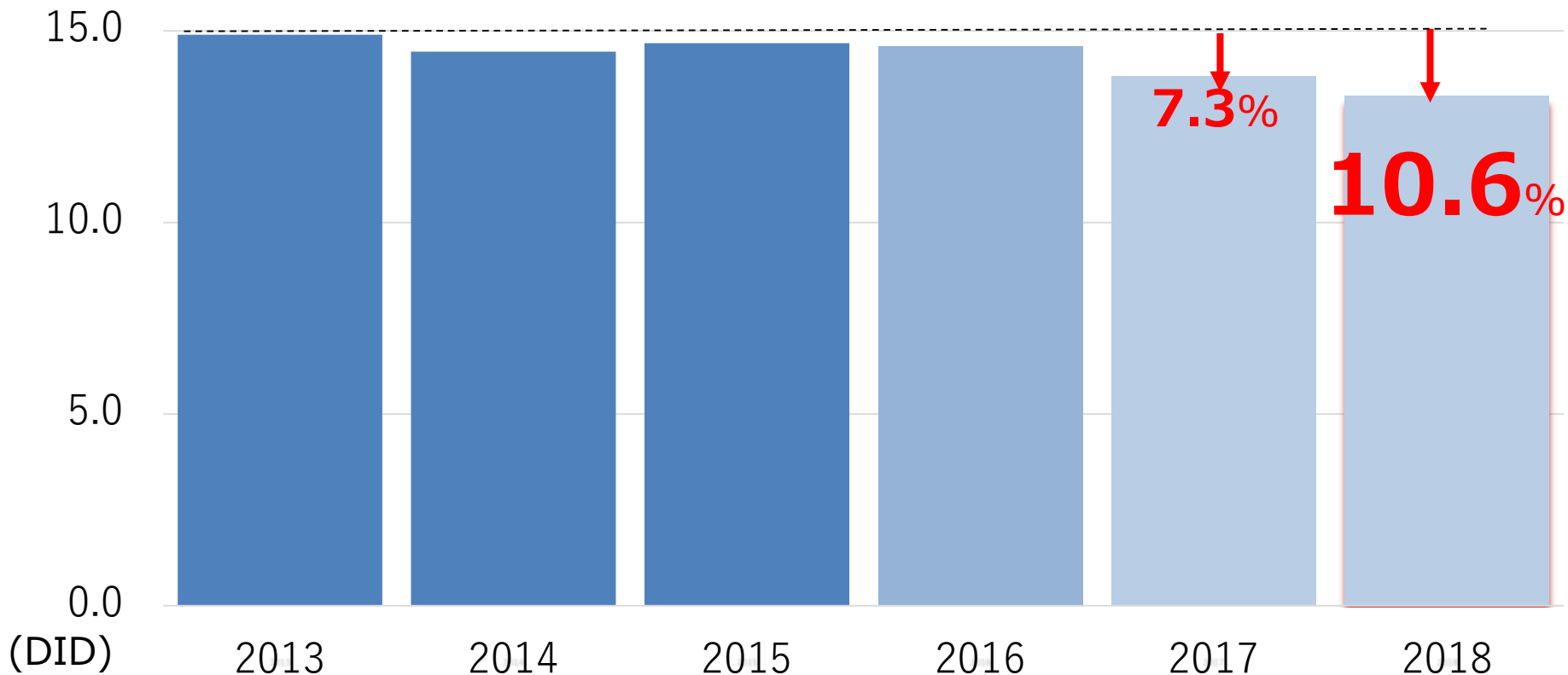


日本における薬剤耐性に関する国民意識

- 一般国民への調査
- 医療関係者への調査
- 家畜飼養者及び臨床獣医師への調査

抗菌薬使用量

(販売量による検討)



経口広域抗菌薬については、2013年と比較し、2018年度は、

- ・ 経口セファロスポリン系薬 18.4%減少
- ・ 経口フルオロキノロン系薬 17.0%減少
- ・ 経口マクロライド系薬 18.0%減少

静注抗菌薬については、 10.0%増加

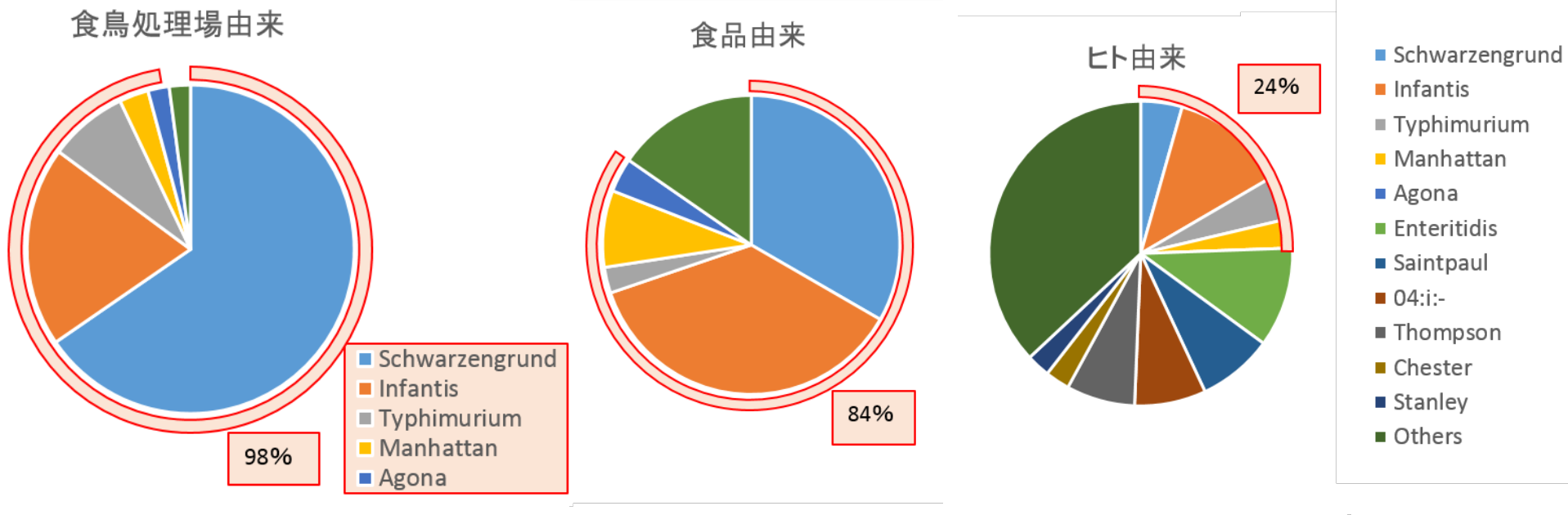
ヒトに関するアクションプランの成果指標： 特定の薬剤耐性菌の分離率（%）

	2013年	2015年	2017年	2018年	2020年 (目標値)
肺炎球菌のペニシリン非感受性率, 髄液検体	47.4	40.5	29.1	38.3	15%以下
肺炎球菌のペニシリン非感受性率, 髄液検体以外	3.2	2.7	2.1	2.2	
大腸菌のフルオロキノロン耐性率	35.5	38.0	40.1	40.9	25%以下
黄色ブドウ球菌のメチシリン耐性率	51.1	48.5	47.7	47.5	20%以下
緑膿菌のカルバペネム耐性率 (イミペネム)	17.1	18.8	16.9	16.2	10%以下
緑膿菌のカルバペネム耐性率 (メロペネム)	10.7	13.1	11.4	10.9	10%以下
大腸菌のカルバペネム耐性率 (イミペネム)	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2%以下 (同水準)
大腸菌のカルバペネム耐性率 (メロペネム)	0.1	0.2	0.1	0.1	0.2%以下 (同水準)
肺炎桿菌のカルバペネム耐性率 (イミペネム)	0.3	0.3	0.2	0.3	0.2%以下 (同水準)
肺炎桿菌のカルバペネム耐性率 (メロペネム)	0.6	0.6	0.4	0.5	0.2%以下 (同水準)

ワンヘルス動向調査検討会資料（2019年10月17日）より

食鳥処理場由来*Salmonella enterica*の上位5血清型の食品及びヒト由来における割合（2015-2017）

（ヒト由来と食品由来の割合は、薬剤耐性ワンヘルス動向調査報告書2018：表18を引用）



動物に関するアクションプランの成果指標：
特定の薬剤耐性菌の分離率（％）

特定の薬剤耐性菌の分離率（％）		2014年	2015年	2017年	2020年 (目標値)
大腸菌の テトラサイクリン耐性率	農場	45.2	39.9	-	33%以下
	と畜場		39.8	40.8	
大腸菌の 第3世代セファロスポリン耐性率	農場	1.5	0.9	-	G7各国の数値と 同水準
	と畜場		0.7	2.1	
大腸菌の フルオロキノロン耐性率	農場	4.7	3.8	-	G7各国の数値と 同水準
	と畜場		2.7	4.0	